

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 5 日現在

機関番号：17101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21730522

研究課題名（和文） 学び合う授業作りを支える教師の即応性の育成を図る協同研究プログラムの開発

研究課題名（英文） Development of collaborative research program for training of Improvised teaching skill creating collaborative classroom.

研究代表者

松尾剛 (Go Matsuo)

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：50525582

研究成果の概要（和文）：

児童が学び合う授業の成立過程では、教師が授業の流れの中で児童の発言に即興的に応じていくことが重要となる。本研究では、教師が行う即応的な応答の過程と、その応答を支えている認知的な要因について検討を行った。特に教師が児童の発言をいかに聴いているかに注目して論文のレビュー、教室談話過程の分析を行った。また、現職の教員を対象とした研修の場でその成果をフィードバックすることで即応性の向上を図った。

研究成果の概要（英文）：

In the formation process of the lesson that children study collaboratively, it becomes important that a teacher responds to a children's remark improvisatorially in the flow of a lesson. This research examined the process of the improvisational response that a teacher performs, and the cognitive factor supporting the response. Moreover, improvement in improvisational teaching skill was aimed at by feeding back to the teacher.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：教授学習心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：即応性、協同学習、批判的思考、教室談話

1. 研究開始当初の背景

近年、児童が互いに学び合う授業づくりへの注目が高まりを見せている。しかし、多くの教師にとってそのような授業を実践することは容易ではない。この問題に対して従来の研究では授業実践過程を詳細に検討することで、有効な教授方略が示されてきた。具体的な例としては、リヴォイシングと呼ばれ

る教師の応答の仕方(O'Connor & Michaels, 1993)や、授業中の談話を支えている暗黙の語用論的ルール of 共有化に関する研究(松尾・丸野,2007)などを挙げるができる。先行研究が明らかにしてきた教授方略に共通する特徴として、授業の流れの中で、教師が即時的に児童の発言に応答していく事の重要性を指摘することができる。しかし、こ

の即応性については、その内実が詳細に検討されているわけではなく、また、その育成のための研修のあり方についても十分な知見が得られているわけではない。

2. 研究の目的

本研究の主な目的は、児童の学び合いを支える教師の即応的な関わりについて、以下の3点を検討する事であった。

(1)教師が行っている即応的な関わりについて、その具体的な様相を検討した。この点については、熟練教師の授業実践過程における相互作用の分析を通じて検討した。特に、教師が児童の発言をいかに聴いているか、という点に注目して分析を行った。

(2)教師の即応的な関わりを支える認知的過程を探索的に検討した。この点については以下の二つの観点から検討した。①授業は複数の活動によって構成されており、それらの諸活動間が関連しながら、教師の聴く行為を支えているという観点から検討を行った。具体的には、児童による意見交流に先立って、児童が個別に自分の意見をまとめる活動に注目した。その活動の際に、机間指導が行われるが、その時の教師と児童の相互作用過程を分析し、その後の意見交流中の相互作用との関連性について検討した。②授業中の教師の感情と児童の発言への応答との関連性について検討を行った。従来の教師の意思決定に関する研究は、授業に先立って教師が授業の流れ(授業の展開や児童から引き出すべき発言など)を明確に定め、授業ではその計画からのズレを常にモニターし、いかにして児童を計画通りに動かしていくか、といった非常に合理的、論理的な認知過程として教師の意思決定過程をモデル化してきた。その中で「感情」を不合理なものとして研究の対象から排除してきた(岡根・吉崎,1992)。一方で、実践の文脈においては、常に言語化可能な論理的思考が有効に機能するわけではなく、また、実際にそのような思考のみが運用されているわけでもない。むしろ、異なる思考のモードとして多様なヒューリスティクスを含む「直観」が有効に機能する場合も多く、そのような思考が豊かに営まれていることも指摘されている(Gigerenzer,2007)。このような、実践の文脈における即興的で適応的な思考を支えている要因の一つとして、近年、感情の役割が明らかにされてきている(海保,1997)。特に、感情による処理に共通する特徴として、素早く人間に現時点での課題解決のスタンスを準備させて、適切に動かしていく(北村・木村,2006)点が指摘されている。本研究の目的は、話し合いを通じて児童が学ぶ過程を授業の中に実現することである。従って、前提としている授業のモデルも従来の研究とは異なり、授業の流れの中で生成され

る児童の発言に対して教師が即興的に応じながら全体での思考を展開していく過程である。このような意思決定過程においては、感情は排除されるべき対象ではなく、むしろ教師の即興的な認知を支える重要な要因だと見なされるべきだと考える。実際に、木村(2010)は高校の社会科教師10名へのインタビュー調査を行っており、協働学習授業の実践過程において快感情(喜び、驚き、楽しさ、心地良さ、満足感)が「活力・動機づけの高まり」「認知・思考範囲の拡張」「即興的な授業展開」と関連し、不快感情(いらだち、悲しみ、不安、退屈感、落胆、苦しみ、困惑、罪悪感、悔しさ)が「授業後の反省」「実践の改善」「授業中の省察」「即興的な授業展開」と関連することを示している。以上をふまえ、児童の発言を聞いた際に教師に生じる感情と、児童の発言に対して教師が行う様々な応答の間にどのような関連性があるのかについて、質問紙調査を用いて検討した。

(3)教員を対象とした研修会を定期的に実施し、参加した教師に対する質問紙調査などを行う事で、教師の即応性の育成を促す研修のあり方について探索的に検討した。

3. 研究の方法

(1)児童が学び合う授業を成立させるための教師の働きかけに関する国内外の文献のレビューを行った。

(2)2009年～2011年にかけて、F県内の複数の小学校において授業観察を実施した。授業の様子はビデオカメラによって録画した。授業中の教師と児童の発言について書きおこしを作成し、定性的、定量的な分析を行った。また、必要に応じて教員へのインタビュー調査を実施した。また、これらの小学校では申請者が年間数回にわたって授業研修の講師を行っており、教員に対して研究の成果をフィードバックしていた。

(3)小学校の教員17名を対象に、授業中に感じる感情と児童の発言への応答に関する質問紙調査を実施した。質問紙の構成は、児童の発言を聞いた際に生じる感情に関する10の側面(興奮、活気、冷静、抑うつ・不安、倦怠、緊張、弛緩、敵意、驚愕、親和)について59項目と、教師の働きかけに関する20項目から構成した。感情に関する項目は、寺崎・岸本・古賀(1992)、城(2008)、木村(2010)を参考に作成し、教師の働きかけに関する項目は松尾(2011)を参考に作成した。それぞれの項目について、授業中に児童の発言を聞いてそのような感情を感じる頻度、および、授業中にそのような働きかけを行う頻度の両方を5件法で回答するように求めた。

(4)2009年～2011年にかけて、F県内の複数の小学校に所属する教員10名程度と協同で、児童が学び合う授業づくりのための研究会

(「教育トライアングル」)を実施した。研究会は隔週土曜日に実施した。内容はテキストの講読と、参加者が行った授業のVTRを全員で視聴して議論を行うという活動から構成されていた。あつかったテキストは、ファシリテーションや教師のコミュニケーションに関するものが中心であった。

授業VTRを視聴した上で議論をする際には、授業者が授業のねらいや働きかけの意図などを説明した上で、教師の働きかけが、協同学習の質を高める上でいかに効果的であったか、また、どのような働きかけがより効果的であると考えられるか、などの視点から参加者全員で議論を行った。毎年度末には、研修会の内容について振り返りのアンケート調査を実施することで、効果的な研修のあり方を探るための基礎資料とした。

4. 研究成果

(1) 先行研究のレビュー

本研究を展開する上で必要な理論的枠組みを整理するために、学び合う授業の成立を支える教師の働きかけに関する文献のレビューを行った。研究成果は「心理学評論」に論文として発表した(松尾・丸野, 2009)。具体的には、従来の研究においてその重要性が指摘されてきたリヴォイシングやリフレクティブ・トス(van Zee & Minstrell, 1997)、授業における沈黙(van Zee et al., 2001)などについて、授業という営みを支えている談話ルールの共有という観点から、その機能性を指摘し、それらのルールの共有過程を3層からなるモデルとして整理した(Figure1)。

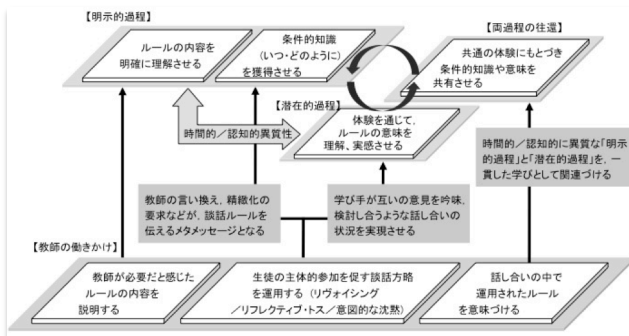
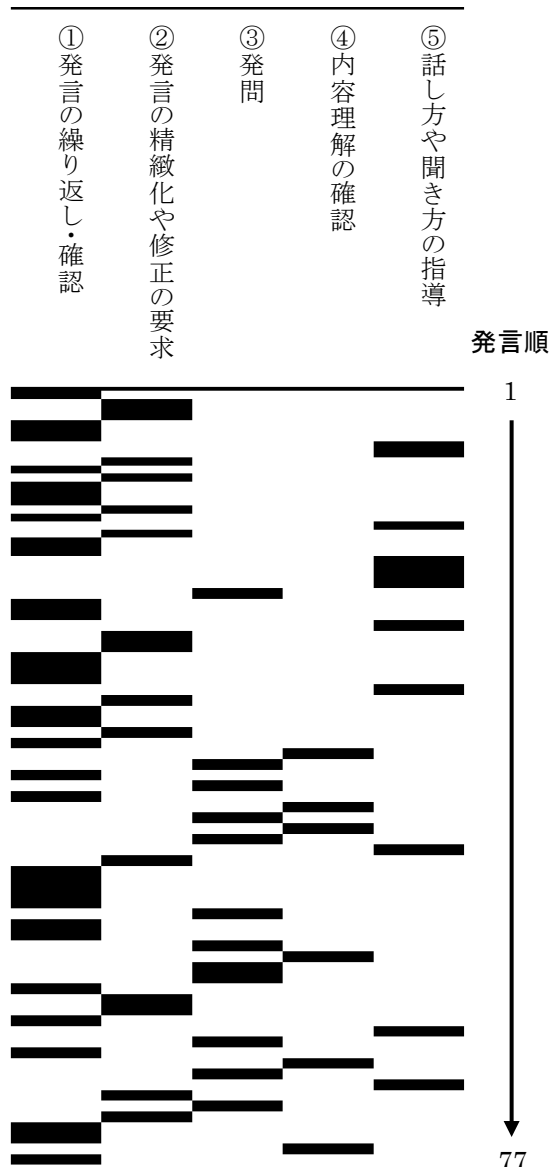


Figure1 談話ルールの共有過程

(2) 教師の「聴く」行為の特徴

本研究を展開していくにあたって、まずは即応的な関わりの具体的な詳細を明らかにしていく事を目的に研究を行った。教師の即応的な関わりを支えているのは、児童の発言を聴くという認知過程である、という前提に立ち、特に本研究では教師が児童の発言をいかに聴いているかという点に注目して検討を行った。松尾・丸野(2010)では、小学校2年生を対象に行われた国語の授業を対象に、

授業中の児童の発言と教師の板書との対応関係を分析することで、教師が児童の発言の何を、どのように聴いているのかを検討した。その結果、教師は児童の発言の中でも、「結論」「根拠となる文章」「読みの視点」「論理的なつながり」という4つの要素に注目しながら聴き、それらを板書上に残している事が示唆された。また、松尾(2011)では、授業の時間的推移に従って、児童の発言に対する教師の応答がどのように変化するかを分析した。Figure2は「児童の発言の繰り返し・確認」などの教師の発言が、授業のどのタイミングで見られたかを図示したものである。個々の児童の発言を引き出し、全体に広げていくような関わりが多く、後半になると発問が出現し始めるというパターンを読み取ることができる。



注：図中の黒い部分はその働きかけがなされた場所を示す。

Figure2 教師の働きかけの出現パターン

(3)即応的な関わりを支える要因の探索

①授業中の活動のつながり

松尾・丸野(2010)では、学級全体での意見交流に先立って行われていた、個人での学び(子どもたちがそれぞれ自分の考えをつくる活動)の際に、教師が行った机間指導中の働きかけの内容を分析した。その結果、教師は児童に対して、考えの曖昧な点を明確にする事を求めるような働きかけや、根拠を明確にする事を求めるような働きかけ、文章をどのように読んだかという考え方を明確にする事を求めるような働きかけを多く行っていた。これらの働きかけの内容は、上述した教師が児童の発言を聴く際の観点とも対応しており、事前の機間指導における対話が、教師が児童の発言を聴く際の枠組みを生み出す機能を担っている可能性が示唆された。

②教師の感情と児童の発言への応答の関連

児童の発言に対する教師の言い換えに関する教師の働きかけと「冷静」「興奮」「活気」「緊張」という感情との間に有意な正の相関がみられた。次に、「児童が述べていない新しい意見を教師が示す」という項目と「活気」「倦怠」「敵意」の間に正に有意な正の相関が見られた。「新しい意見を思いつくための視点や発問を教師が示す」という働きかけは「興奮」との間に有意な正の相関が認められた。最後に、児童が相互にやりとりすることを促す教師の働きかけと、「抑うつ」「冷静」の間に有意な正の相関が見られた。

(4)即応性の育成を促す研修のあり方の探索

以下の2つの授業研修の場で研究知見のフィードバックを継続的に行った。①教員との研究会(教育トライアングル)を52回(2009年度17回、2010年度17回、2011年度18回)開催した。参加者からは、授業を意味づけられることで、新たな視点から子どもの発言について捉え直すことができた、などの感想が得られた。また、尾之上・丸野・松尾(2011)では、調査対象校において国語の授業4単元分の相互作用過程を分析した。後半の単元ほど、教師が児童の発言を関係づける関わりが増加する傾向が見られた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 松尾剛 2012 授業実践過程における教師の感情と児童への応答との関連 福岡教育大学紀要, 61, 67-75. (査読無)
- ② 尾之上高哉・丸野俊一・松尾剛 2012 学び合う授業の実現に向けて、教師は如何に談話方略を運用しているのか 教授学習心理学研究, 7, 39-55. (査読有)

- ③ 松尾剛 2011 「授業」を支える暗黙のルール-学び合いの場をつくる教師の働きかけ- 発達, 125, 48-55. (査読無)

- ④ 松尾剛・丸野俊一・山本俊輔 2011 日常の授業実践を通じて児童の批判的思考はいかに育まれるか 福岡教育大学紀要, 60, 91-102. (査読無)

- ⑤ 松尾剛・丸野俊一 2010 熟練教師は児童の発言をいかに聴いているか 福岡教育大学紀要, 59, 71-78. (査読無)

- ⑥ 松尾剛・丸野俊一 2009 学び合う授業を支える談話ルールをいかに共有するか 心理学評論, 52, 245-264. (査読有)

[学会発表] (計3件)

- ① 松尾剛 授業における教師の感情状態と児童の発言への応答との関連 日本教育心理学会第53回総会 かでる2・7 2011年7月25日

- ② 松尾剛 小学校におけるCTの育成 (シンポジウム:クリティカル・シンキング-小・中・高等学校における教育実践の発達の検討-) 日本教育心理学会第52回総会 2010年8月29日 早稲田大学

- ③ 松尾剛・丸野俊一 教師のきく行為を支える授業過程:机間指導に注目して 日本教育心理学会第51回総会 2009年9月22日 静岡大学

[図書] (計1件)

- ① 松尾剛 2010 学級文化と授業 高垣マユミ(編著) 授業デザインの最前線Ⅱ 理論と実践を創造する知のプロセス 北大路書房 200-211.

6. 研究組織

(1)研究代表者

松尾 剛 (Go Matsuo)

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号:50525582